

15

枕草子・徒然草

単元の確認

作者・作品の確認



随筆		
見聞・経験・感じたこと・考えたことなどを自由な形式で書き記した文章		⇒ 作者の個性、ものの見方、考え方がよく表れる場合が多い
徒然草	作品	枕草子
鎌倉時代末期	成立年代	平安時代 (十世紀末～十一世紀初め)
兼好法師	作者	清少納言
歌人として活躍したが、古典学者としても有名だった。	作者の立場	一条天皇の中宮(のちに皇后)定子に仕えた女房。
<ul style="list-style-type: none"> 序段と第二百四十三段までの総計二百四十四段から成る。 一段はそれほど長くない。 	構成	<ul style="list-style-type: none"> 約三百段の文章が順不同に並ぶ。
<ul style="list-style-type: none"> 人生や世の中に対する批評、滑稽な失敗談、故実に関する知識などを述べている。 貴族・僧侶・武士・庶民など、広く多様な階級の人たちに目をむける。 人としての好ましい生き方や生きるうえでの知恵やたしなみを記している。 	特徴	<ul style="list-style-type: none"> 定子の命を受け女房の立場から、宮中の日常の回想や、自然・人間についての感想を書いている。 「すばらしい」「美しい」と感じた瞬間を色鮮やかに描き出す。 定子たちと過ごしたすばらしい日々の記録。

● 「方丈記」(鴨長明・鎌倉時代初期)と「枕草子」「徒然草」をあわせて、「日本古典三大随筆」といわれる。

作者・作品の確認問題

学習のポイント

- 古語、古文特有の決まりごとや表現に注意しながら、古文を読む。
- 作者のものの見方や考え方を捉える。

1 随筆には、どのような特徴がありますか。

作者の見聞や

などを自由な形式で書いた文章で、作者の

や、ものの

、考えなどが表れる。

2 ①「枕草子」、②「徒然草」について、それぞれの作者は誰で、いつ成立しましたか。

① 作者は

で、

時代に成立した。

② 作者は

で、

時代末期に成立した。

3 「枕草子」には、どのような特徴がありますか。

中宮

の命を受けて、作者が

の立場から

の日常を描いたもの。

4 「徒然草」には、どのような特徴がありますか。

人生や

に対する

、滑稽な失敗談、故実に

関する

などを述べている。

貴族・僧侶・武士・

など、広く多様な

の人たち

に目をむけている。

知識の確認

1 歴史的仮名遣い (古典の仮名遣い)

(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
②イ段の音+「う」(ふ) ↓イ段の音+ゆう しう <siu> ↓ シュ <syū>	①ア段の音+「う」(ふ) ↓オ段の長音 かう <kau> ↓ コ <kō>	「つ」 ↓ 小さい 「つ」 ※促音(つまる音)は現代仮名遣いでは小さく書く。	「ぢ」 ↓ 「じ」 「づ」 ↓ 「ず」	ワ行の 「わあうゑを」 ↓ 「わいうえお」 ※ゑ・ゑは現代仮名遣いでは使用しない。	語中・語尾のハ行の 「はひふへほ」 ↓ 「わいうえお」
かなしう ↓ かなしゆう あやしう ↓ あやしゆう じふ (十) ↓ じゅう	やうやう ↓ ようよう たふとし ↓ どうとし まうづ (詣づ) ↓ もうづ	しつかと ↓ しつかと 取らむ ↓ 取らん	まうづ (詣づ) ↓ もうづ いづこ ↓ いずこ はぢ (恥) ↓ はじ りなか (田舎) ↓ いなか こずゑ ↓ こずえ ひをけ (火桶) ↓ ひおけ	りなか (田舎) ↓ いなか こずゑ ↓ こずえ ひをけ (火桶) ↓ ひおけ はぢ (恥) ↓ はじ いづこ ↓ いずこ まうづ (詣づ) ↓ もうづ 取らむ ↓ 取らん	あはれなり ↓ あわれなり むかひて (向かひて) ↓ むかいて いふ (言ふ) ↓ いう …さへ ↓ …さえ ものぐるほし ↓ ものぐるおし

2 古典の言葉とその意味

(1) 現代語では使われなくなったもの

古語	例	意味
いと	たいへん・非常に	
さらなり	言うまでもない	
つとめて	早朝	
つきづきし	似つかわしい	
はた	これもまた	
やうやう	だんだん・やつと	
つゆ	全然……ない	

(2) 現代とは意味が異なるもの

古語	例	意味
日暮らし	一日中	
心うし	残念だ	
おはす	いらっしやる	
よしなし	とりとめのない	
はべり	……ごさいます	
ゆかし	知りたい	
いみじ	程度がはなはだしい	
つれづれなる	退屈な	

3 主語をつかむ

主語で使われる「が」「は」 (助詞)の省略	例
主語の省略	例
「の」が主語になる場合	例

語例	古語の主な意味	現代語の主な意味
をかし	趣がある・かわいらしい など	滑稽だ・奇妙だ など
あはれなり	しみじみと心ひかれる	かわいそうだ など
あやし	不思議に思つて など	様子がおかしい など
年ごろ	長年の間	何かをするのにふさわしい年齢 など

「が」(助詞の省略)
日入り果てて、

寒さが(主語)

例 昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、
 螢がたくさん飛び交っている。
 螢の多く飛びちがひたる。

4 係り結び

● 係りの助詞によって文末の結びの形が変化すること。

参考93ページ 知識の確認

係りの助詞	意味	結びの形
ぞ	強調	結体形
なむ	疑問・反語	連体形
や		
か		
こそ	強調	已然形

★ 係り結びには、「感動・疑問・強調・反語」などの働きがある。

例 聞きしにも過ぎて尊まこそおはしけれ。
 (「話に) 聞いていたのにも勝まさつて尊まくいらつしやいました。)

強調 係りの助詞 結び (通常の形は「けり」)

5 「枕草子」「徒然草」の冒頭

① 「枕草子」第一段「春はあけぼの」

四季で最も「をかし」と感じられる時間帯	風物
一……「春はあけぼの。」 ↓	山際の空の変化、紫 <small>むらさ</small> がかつた雲
二……「夏は夜。」 ↓	月の夜、闇 <small>やみ</small> の夜、蛩 <small>せみ</small> 、雨
三……「秋は夕暮れ。」 ↓	鳥 <small>とり</small> 、雁 <small>かり</small> 、風の音、虫 <small>むし</small> の音
四……「冬はつとめて。」 ↓	雪の朝、霜 <small>しも</small> 、炭を運ぶ姿

② 「徒然草」序段

「つれづれなるままに」(何もすることがないままに) ↑ 題名「徒然草」の由来

● 心に移りゆくよしなしごとを、
 そこはかたなく書きつくれば
 心に浮かんでは消えてゆく
 くとりとめのないことを
 何という当てもなく書き
 つけていると

執筆の経緯

● あやしうこそものぐるほしけれ。妙たに変な感じがしてくることだ ↑ 執筆時の心境

知識の確認問題

1 歴史的仮名遣い 次の言葉の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

① やうやう ② 山際やまぎは

③ をかし ④ なほ

⑤ あやしう ⑥ 言いふ

⑦ 詣まうでけり ⑧ 石清水いししみづ

⑨ 飛びちがひたる

⑩ 飛び急ぐさへあはれなり

2 古語の意味 次の古語の意味として適切なものを後からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① をかし ② つきづきし ③ つとめて

3 古語の意味 次の線の古語の意味として適切なものを後からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 月の頃はさらなり

ア 皿のように丸い イ 言うまでもない

ウ 周りが明るい

② 飛び急ぐさへあはれなり

ア みじめになる イ かわいそうで見えられない

ウ しみじみと心ひかれる

③ 白き灰がちになりてわろし

ア みつともない イ 悪くはない

ウ 信じられない

④ 古文の主語 次の「—線の「の」と働きの異なるものを後から一つ選び、記号で答えなさい。

雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。

ア 雪の降りたるは イ 夕日の差して

ウ 火桶ひまがしの火も エ 霜のいと白きも

⑤ 係り結び 次の□□に（ ）内の—線の語を活用させて入れ、係り結びを完成させなさい。

① つゆをかしからじと思ふこそ、また

（をかし）

② 「……山までは見ず。」とぞ言ひ

（言ひけり）

⑥ 冒頭の内容 次の①「枕草子」、②「徒然草」の冒頭に関する説明の□□に当てはまる言葉をそれぞれ書きなさい。

① 「枕草子」の第一段「春は

」では、季節の中で

作者が最も「

」と感じられる時間帯を挙げ、続いて季節を代表する生き物として、夏の

、秋の鳥や雁などの様子も描いている。

② 「徒然草」の序段では、「

なるままに」と題名の

由来や、「

こそものぐるほしけれ」という執筆時の心境が述べられている。

◆ 漢字の確認 ◆

◆ 漢字の読み書き — 線の漢字に読み仮名を書き、片仮名は漢字に直しなさい。

教科書 p. 120, 127

① 鎌倉時代の末。

② 紫がかった雲。

③ 蛍が飛び交う。

④ 情趣のある文章。

⑤ 夏の闇夜。

⑥ 軒の上の蜘蛛の巣。

⑦ 滑稽な話をする。

⑧ 感慨を表す。

⑨ 貴族や僧侶。

⑩ 神社に一人て詣でる。

⑪ ズイヒツを書く。

⑫ シモが降りる。

⑬ 寒さがユルむ。

⑭ ニヨウボウとして仕える。

⑮ タクみに表現する。

⑯ 歌人としてカツヤクする。

⑰ アザやかに描く。

⑰ 輝かしいキュウテイ生活。

⑱ ショミンに目を向ける。

⑲ 深くドウサツする。